

はじめに一研究の課題

1 「単一民族」の神話

われわれは、日本社会が単一民族により構成されている、それが日本社会の特質だ、と思い込んできた。あるいは、他民族を意識することなく生活をしてきた。しかし、現実はどうであろうか。我々のインタビューから引用しよう。

中学のときすごくいやなことがね、"Are you a Japanese?" って英語の先生がいうんですね。そしたらみんなが "Yes, I do." っていうんですね。そのときに自分で "Yes, I do." っていういながらすごくいやなんですね。先生はもうそういう答えが当たり前だと思っていうんだけど、私も "No, I don't" っていうたいんだけど、"Yes, I do." って混ざっているんですね(1)。

重要なことは、この先生だけでなく、われわれ日本人の多数が、日本人以外の民族を出自とする生徒が教室にしようが、いまいが、それを意識することなく日常の生活を送りつづけてきた、こうしたなかで、自分が日本人ではなく別の民族であること、異なる文化や言葉をもってきたことなどを表明する機会が奪われ、傷つく隣人のいることに気づかぬまま生きているということである。こうしたことが意識されることは、特定の自覚的な人、在日韓国・朝鮮人多住などの特定地域の人をのぞき少ないように思われる。

周知のように、実態からいうと、日本社会はアイヌ民族や数10万にのぼる在日韓国・朝鮮人、中国人から構成される「多民族社会」である。この点で、欧米諸国と質的な違いはないとさえいえよう⁽²⁾。日本社会の特殊性は、日本が、「単一の民族により構成されている」、と信じていること、「単一」といわないまでも、欧米諸国と比較して比較的単一の民族に近い構成をとると、信じていることであろう。いわゆる「単一民族」の神話の存在である。

実際に「単一民族」かどうかではなくて、「単一民族により構成されている」という意識が強いということがわが国の特殊性なのであるが、それが<神話>といわれる所以は、実態からはかい離しつつも、それが外国人労働者の流入に対する心理的抵抗として働いてきたし、また、いうまでもなく在日韓国・朝鮮人に対する「同化」の強い圧力となり、さらに差別問題の背景となっていることに求められる。